



再び「死」について  
て



jadequerida

## 再び「死」について

DIAMOND onlineに掲載された〈大震災で「生」と「死」を見つめて（吉田典史）〉"検死医が目の当たりにした「津波遺体」のメッセージ 高木徹也准教授のケース"を読んだ。警視庁の依頼で3月11日東北地方を襲った巨大津波による被害者の遺体を検死した法医学者の報告書である。高木医師は一週間で130ほどの遺体を検死したということで顔がうっ血している遺体が多く瓦礫などが速い速度でぶつかり、胸部や腹部が圧迫され 頭部から心臓に血液が還らない状態に陥ったためと思われ 海や川、プールなどで亡くなる溺死が気道に大量の水が一気に入り込み呼吸が出来なくなり死亡するケースとは様子が異なるとのことで今回は9割以上が津波による溺死であるがそれに（1）船や車、家、瓦礫、押し寄せる波の水圧などが時速数十キロのスピードで当たり胸部圧迫による死亡。（2）一気に大量の水を飲み込む事での窒息。（3）凍死。（4）瓦礫が頭に当たり脳挫傷などになり死亡したなど複合的な要因が考えられるという。私は拙著「人間は本当に進歩しているのか/死 & おわりに」の中で〈死ぬ時は何の苦しみもなく生命が旅立てるように配慮されている〉と書いた。「死」が訪れかけると「生」と「死」が壮烈な死闘を繰り広げる。「生」は生命を奪われまいと渾身の力を振り絞って「死」と闘う。「死」は生命をもぎ取ろうとして物凄い力で闘う。当然 両者の間に挟まれた「生」と「死」の境界領域を彷徨う人に苦痛が訪れる。その時 人間の脳内に鎮痛、鎮静作用があり多幸感をもたらすベータエンドルフィンとかエンケファリンという神経伝達物質が分泌され苦痛を取り去って安らぎ、満足感、多幸感を与える。臨死体験談を読むと色とりどりの花や或いは白（黄）一色の花がいっぱい咲き乱れている花畑の中に自分が居てまるで天国に来たような感じの体験が数多くあるが死者はその多幸感を表情に残したまま旅立つ。したがって死者の顔には恐怖に引きつた顔とか苦しみに歪むような様は一切無く やすらぎと安堵に満ちた顔をしている。米国人のサイエンスジャーナリストのメアリー ローチ(Mary Roach)女史はその著書「死体はみんな生きている」の中で〈私は様々な死体を見たが 憂鬱にさせられたり 心をかきむしられたり 嫌な気分させられたりするものは無かった。彼らは感じよく 善意に溢れ 時には悲しげで 時には明るかった〉と書いておられる。（「人間は本当に進歩しているのか/死 & おわりに」参照）>逝く者は安らかに眠るのだ。然し瓦礫や時速数十キロのスピードの波で胸部を強打されたり頭部を瓦礫に強打されて死亡する場合は脳内神経伝達物質が分泌する時間さえ無く死亡に至る。凍りつくような水中に何時間も漂ったりした場合は意識レベルは低下しストレスで錯乱した脳回路に悪魔の幻覚を生み出すことさえあるという。苦痛があまり長く続くと脳が錯乱し錯乱した脳が幻覚を生み出す。苦痛が長引くと脳内で分泌される苦痛を除去する神経伝達物質も枯渇する。以前読んだ本の中に〈零下に近い河に飛び込んで自殺した人間の表情は恐怖に引きつっていた〉という一節があった事を覚えている。上記 高木医師の報告書にも〈瓦礫に挟まり水の中で身動きがとれないまま凍死したと思われるものがあった〉とある。

## 再び「死」について

新聞では「頑張った表情だった」とか「眠るように死んでいた」という表現が目立つということだがそれは嘘だと思う。そうでなければ運良く普通の死に方をした人だけを見て書いた記事だと思う。あのような状況下で安らぎと安堵に満ちた顔で旅立った人はそう多くはないはずだ。然しここで留意すべき点は亡くなられた方々が表情に見られるような苦痛を死後も引きずっているのではなく現在は苦痛とか恐怖の全くない安らぎと安堵の世界におられるということだ。「死体はみんな生きている」の一節をもう一度繰り返してみよう。私が初めて死体に遭遇したのは、三十六歳の時で死者は八十一歳だった。「母の死体」という言い方をすると、いかにもかつて母のものだったが、母その人ではないという感じがする。母は死体であったことはない。人は決して死体ではない。人であった人間が人であることをやめた時、死体がその後に入り込む。母はもう行ってしまった。ここにあるのは母の抜け殻、私にはそう思えた。地獄の苦しみを味わって去っていった人々を想うと限りなく悲しい。然しそれは過去のことでその人々の生命は死体という抜け殻を置き去りにして行ってしまったのだ。悲しい事実だが時間が経過した現在は状況が違っているということを理解することも大事な事だ。死ぬ直前の人間と死後の人間では何もかも全く違うのだ。死後のことは誰にもわからない。死後の世界を云々する人は沢山居る。それらの説を信じる人には（その説を信じている間は）その説は正しいが信じない人にとっては正しくない。死後のことについては正しい解答を出すのは難しいが「生」については「死」の方から眺めると中がよく見える。人によっては「生」の原点まで到達することも可能であろう。また「生」と「死」について全くの想像とか思考ではなく現在科学でわかっていることを想像と思考に組み合わせるとより真実に近い状態を生み出すことは可能である。エリザベス キュープラー ロスという女性が書いた「死ぬ瞬間の対話」と「続 死ぬ瞬間」を読んだことがある。訳者の川口正吉氏によるとE キュープラー ロス女史はスイス生まれの精神科医で1966年以来 数百人ものあらゆる階層、環境、年齢、性格、状態の「臨死者」とインタビューし極めて具体的 実際的な問答集を綴ったとある。内容は示唆に富むものが多くあり死にゆく人と向かい合う人達（肉親、医師、看護師、介護士、牧師等）でない人にも得られるものは多くある。女史はその書の中で心の底から強い信仰を持った真に宗教心が篤い人は極めて少なかったがこの少ない人々はその信仰に助けられた。患者の大多数は少数の真の意味での無神論者と真に宗教心の篤い人との中間に位置していて何らかの宗教的信念は持ちながらもその信念は内的抗争と恐怖から解放してくれるほど強くはなかったのである。早い段階で私たちの知り得た患者の内的抗争と防御機制とから、彼がその最終危機に際してどんな形の防衛機制を強力に使うかは、ある程度まで予測することが出来た。一般的に言って、教育程度が低く、知性の低い、社会的な絆と職業上の義務の少ない単純な人々の方が、物質的な豊かさ、快適な生活環境、多くの付き合いと人間関係を失うこととなる富裕階級の人々よりも、この最終危機に困難なく直面することが出来たようである。一生を苦勞と激しい労働のうちに過ごした人、子供たちを育て上げた人、自分の成し遂げた仕事に満足している人々の方が、平安と威厳をもって受容することが容易であったようである。

## 再び「死」について

---

<これに対して、一生を野心的に周囲環境を支配してきた人、物質的な財を蓄積してきた人、社会的な付き合いは非常に多数にのぼりながらも、生の終わりにあたって助けとなるような有意義な人間関係の少ない人等は容易ではないようであった。>死後の天国と地獄は実は生きている間の出来事で死を前にした人達に現れる現象のようだ。<私たちは患者にとっては、死そのものは問題でなく、死に行くことが、それに伴う絶望感と隔離感のゆえに恐ろしいことであることを学んできた。><怖れることがより少なく生きられるように、彼らを助けるべきである。>病院の室の片隅で自分の力ではどうすることも出来なくて憔悴し疲れきって「死」を待っている人の「死」に対する考え方と比較的元気な状態で「死」を待つ人の考え方は違うだろうし個人ごとに違いはあるかもしれない。そのプロセスがどうであれ「死」という通過点を境にして全員同じ場所に辿り着く。辿り着くところは同じであるから通過点「死」以降について明確なビジョンをもっている人ほど「死」までのプロセスでの苦しみが少ないことになる。「死」は例外なく全ての人に訪れる。私は拙著「生命は宇宙からやってきて宇宙へ還る」で書いたように生命は「死」という通過点を経て宇宙へ還るということを信じている。家内には死後の世界に入る時に大好きな死んだおばあちゃんに迎えに来てもらいたいなら今のうちから毎晩就寝前に亡くなったおばあちゃんと会話をするようにと話している。今回の巨大津波の犠牲になって亡くなられた方々は癌の末期患者とは違う苦しみをされた。突然の予期しなかった巨大津波という災害に呑み込まれて他界された人達の事を考えるとこの上もなく悲しく、やるせなく、怒りがこみ上げる。然し「死」という通過点を通過すると巨大津波に呑み込まれて亡くなられた方々も癌で苦しんで亡くなられた方々も同じ平和で、のどかな、安堵出来る環境におられる。巨大津波の際、死ぬ瞬間に間に合わなかった神経伝達物質ベータエンドルフィンやエンケファリンも死後間髪を入れずに分泌され死後の世界では抜け殻とは全く違う穏やかな顔つきでおられるはずだ。亡くなられた方々のご冥福を祈る。